

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	慶應義塾図書館蔵『酒呑童子』翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2004
Jtitle	三田國文 No.39 (2004. 9) ,p.27- 39
JaLC DOI	10.14991/002.20040900-0027
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20040900-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾図書館蔵『酒呑童子』翻刻

石川 透

凡例

本書は、慶應義塾図書館蔵の室町物語『酒呑童子』である。

本書の挿絵の影印は、石川透『慶應義塾図書館蔵 図解御伽草子』（慶應義塾大学出版会、二〇〇三年四月）に含まれている。

解題等は、そちらを参照していただきたい。

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「」括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかつたが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかつた。

しゆ天童子 上（題簽）

むかし、わか朝のことなるに、天地ひらけしよりこのかたは、神こくといひながら、又は、ふつぼうさかんにて、人皇のはしめより、えんきのみかとにいたるまで、わうぼうともにそなはり、まつりことすなほにして、氏をもあはれみ給ふこと、けうしゅんの御代とても、これにはいかてまさるへき。

しかれども、世の中に、ふしきのことの出来たり。たんはの

くに、大江山には、きしんのすみて、日のくるれは、きんこくたこくのものまても、かすをも知すとりて行。みやこのうちにてどる人は、みめよき女はうの、十七八をかしらとして、これをもあまたとりてゆく。

いつれもあはれはおとらねとも、こゝに、ものゝあはれをとゝめしは、院に宮つきだてまつる、いけたの中納言くにたかとて、御おほえめてたくし、たからはうちみち／＼て、ふつきの家にてましますか、ひとりひめをもち給ふ。

三十二さうのかたちをうけ、ひしんのひめ君を、見きく人、心をかけぬものはなし。ふたりのおやの御てうあひ、なのめならす。かほとにやさしきひめ君を、ある日の暮のことなるに、行かたしらすうせ給ふ。

ちゝくにたかをはしめとし、きたの御かたの御なけき、おちやめのとや女はう達、そのほか、ありあふものまても、うへをしたへとかへしける。

中納言は、あまりのことのかなしさに、さこんをめされ、「いにに、さこん、うけ給はれ。此ほと、みやこにかくれなき、むらをかのまさときとて、名よのはかせのありときく。つれてま

「いれ」と、おほせける。「うけ給はる」と申て、つれて御しよへそまいりける。

いたはしやな、ちくにたかも、みたいところも、はちも人めもいらはこそ、はかせにたいめんめされつゝ、「いかに、まさとき、うけ給はれ。それ、人のならひにて、五人十人ある子さへ、いつれをろかはなきならひ、身つからは、たゞひとりのひめを、ゆふへのくれほとに、ゆき方しらす、みうしなふ。ことし十三、とらのとし、むまれてよりもこのかたは、えんよりしあへおるゝさへ、おちやめのとのつきそひて、あらき風をもいとひしに、まよひへんけのわさならは、みつからをも、もろともに、なとや、つれてはゆかさりし」と、たもとをかほにをしあてゝ、「うらなひ給へ。はかせ」とて、れうそく万ひき、はかせかまへにつませつゝ、「ひめか行ゑをしるならは、かすのたからをえさすへし。よく／＼うらなひ（数字欠カ）」。

〔挿絵・第一図・欠〕

もとより、はかせは、めいしんにて、ひとつのかきものとり出し、くたんのていをみわたし、よこ手をちやうとうち、「ひめ君の御ゆくゑは、たんはのくに、大江山のきしんかわさにて候なり。御いのちにはしさいなし。なを、それかしかほうへんにて、えんめいといのらん。なにのうたかひあるへきそ。此うらかたをよく見るに、くはんせおんに、御きせいあり、くはんおんへ御まいりあり、よきに御きせいましまさは、ひめきみ、さうなくみやこにかへらせ給はん」と、見とをすやうにうらなひて、はかせはわかやにかへりける。

中なこんも、みたいところも、きこしめし、「これは、ゆめか

や、うつゝか」と、なけかせ給ふ御ありさま、なによたとへむかたもなし。

中なこんとのは、おつるなみたのひまよりも、いそき、たいりへそうもんありければ、みかと、えいらんまし／＼て、くきやう大しん、あつまりて、いろ／＼せんき、まち／＼也。

その中に、くはん白との、すゝみ出、「さかの天わうの御代のとき、これににたりしことありしに、こうぼう大しのふうしこめ、こくとをきつて、しさいなし。さりながら、今こゝに、らいくはうをめされつゝ、「きしんうてよ」との給はゝ、さたみつ、すゑだけ、つな、きんとき、ほうしやうをはしめとし、この人々／＼には、おにかみも、おちをのゝきて、おそれをなすと、うけ給はる。此ものともに、仰せつけられ候へかし」。

みかと、「けにも」とおほしめし、いそき、らいくわうをそめされける。

よりみつ、ちよくをうけ給はり、いそき、さんたいつかまつりけるに、みかと、えいらんまし／＼て、「いかに、よりみつ、うけ給はれ。たんはのくに、大江山には、きしんかすみて、あたをなす。わたくになれば、そつとのうち、いつくに、きしんのすむへきそ。いはんや、ちかきあたりにて、人をなやますいはれなし。はやく、たいらけよ」とのせんしなり。

よりみつ、ちよくめいうけ給はり、「あつはれ、大しのせんかな。きしんは、しんつうへんけのものなれば、うつてむかふとするならは、ちりや木のはと身をへんし、われらほんぶのまなこにて、見つけん事はかたかるへし。さりながら、ちよくをは、いかで、そむくへき」。

〔挿絵・第二図〕

いそきにかへりつゝ、人／＼をめしよせて、「われらかちからにては、かなふまし。仏神にいのりをかけ、神のちからをたのむへし」。「もつともしかるへし」とて、よりみつとほうしやうは、やはたにしやさんありければ、つな、きんときは、すみよ

しへ、さたみつとすゑたけは、くま野へさんろうつかまつり、さま／＼の御りうくはん、もとより、ふつぼう、神ごくにて、神もなふしゆまし／＼て、いつれも、あらたに御利しやうあり。

〔挿絵・第三図〕

よりみつ、おほせけるやうは、「このたひは、人あまたにてかなふまし。以上六人か、山ふしにさまをかへ、山路にまよふふせいにて、たんはのくに、おにかしやうへたつねゆき、すみかたにもしるなは、いかにも、ふりやくをめくらして、うつへき事はやすかるへし。めん／＼、おひをこしらへて、くそく、かふとを入給へ。人／＼、いかに」とありければ、「うけ給る」と申て、めん／＼、おひをこしらへける。

まつ、らいくはうのおひには、らんてんくさりと申て、ひおとしの御よろひ、おなしけの五まいかふとに、しゝわうとこそ申けれ。千すいと申せしつるき、二しやく一すん候しをおひの中にそいれ給ふ。

ほうしやうは、むらさきおとしのはらまきに、おなしけのかふとをそへ、いはきりと申て、二しやくありけるこなきなた、ふたへにかねをのへつけて、三そくあまりにねちきりて、おひの中へそ入給ふ。

つなは、もえきのはらまきに、おなしけのかふとをそへ、お

にきりといふ太刀を、おひの中に入給ふ。

さたみつとすゑたけ、きんときは、おもひ／＼のはらまきに、おなしけのかふとをそへ、いつれもおとらぬつるきを、おひの中にそいれにける。

〔挿絵・第四図〕

さゝへと名つけて、さけをもち、火うち、つけたけ、あまかみを、おひのうへにそとりつけて、思ひ／＼のうちかたな、ときん、すゝかけ、ほらのかひ、こんかうつえをつきつれて、日本ごくの神ほとけに、ふかくきせいを申つゝ、みやこを出て、たんはのくにへといそかせ給ふ。

この人／＼のありさまは、いかなる、てんまはしゆんも、おそれをなすへきとおほえたり。いそかせ給へは、ほともなく、たんはのくにゝきこえたる、大江山にそつき給ふ。

さるほどに、こゝに、しはかる人にゆきあひて、よりみつ、おほせけるやうは、「いかに、山人、このくにのせんぢやかたけは、いつくそや。おにのいわやを、ねんころにをしへてたへ」とそ、おほせける。

山人、このよし、うけ給はり、「このみねを、あなたへこえさせ給ひつゝ、又、たにみねのあなたこそ、おにのすみかと申て、人けん、さらに行ことなし」と、かたりける。

よりみつ、きこしめし、「さらば、このみね、こせや」とて、「たによみねよ」と、わけのほり、とあるいはあな、みたまへは、しはのいほりのその中に、おきな三人ありけるを、らいくはう、このよし御らんして、「いかなる人にてましますそ。おほつかなし」とそ、おほせける。

おきな、こたへて仰せけるは、「われ／＼は、まよひへんけのものにてはなし。一人は、津のくにの、かけのこぼりのものにてあり。一人は、津のくにの、おとなしさとのものにてあり。今一人は、京ちかき、山さきのものにてあり。此山のあなたなる、しゆてんとうしといふおに、つまをとられ、むねんさに、そのかたきをもうたんため、このころ、こゝにきたりたり。きやくそなたちをよく見るに、つねの人にてまします。ちよくちやうをかうふりて、『しゆてんとうしをほろほせ』との、御つかひと見えてあり。此三人のおきなこそ、つまをとられて候へは、せひ、せんたちを申へし。おひをもおろし、心うちとけ、つかれをやすめ給ふへし。きやくそなたち」と申されける。

らいくわう、このよし、きこしめし、「おほせのことく、われ／＼は、山みちにふみまよひ、くたひれて候へは、さらは、つかれをやすめん」と、おひともをおろしきを、さゝへのさけをとり出し、三人の人／＼に、「御しゆをきこしめせ」とて、参らせける。

おきな、おほせけるやうは、「いかにもして、しのひいらげ給ふへし。かのおに、つねにさけをのむ。その名をよそへて、しゆてんとうしと名つけたり。さけをもり、えひて、ふしたるものならは、せんこをしらす候なる。この三人のおきなこそ、こゝに、ふしきの酒をもつ。その名をしんへんきとくしゆといひ、神のはうへん、おにのとくさけとよむもしそかし。このさけ、おにかのむならは、ひきやうしさいのちからもうせ、きるともつくとも、しるましき。御身たちか、このさけをのめは、かへつて、くすりとなる。さてこそ、しんへんきとくしゆとは、の

ちの世までも申へし。なを／＼、きとくをみすへし」とて、ほかふとをとりいたし、「御身は、これをきたまひて、きしんかくひをきりたまへ。なにのしさいもあるましき」と、くたんのさけをあひそへて、よりみつにこそ、くたされける。

〔挿絵・第五図〕

さて、六人のひと／＼は、このよしを御らんして、「さては、三しやの御神の、これまでけんしましますか」と、かんるいきもにめいしつゝ、かたしきなくとも、中／＼に、ことはにも、いひかたし。

そのとき、おきなは、いはやをたちいて、「なを／＼、せんたんち申さん」とて、せんちやうかたけをのほりつゝ、くらきいはあなを、十ちやうはかり、くゝりいて、ほそたに川にいて給ひ、おきな、おほせけるやうは、「この川かみを、のほらせ給ひて、御らんせよ。十七八なる上らうの、おはすへし。くはしく、あひてとひたまへ。きしんのうつへきそのときは、なを／＼、われらもみつくへし。住よし、やはた、くま野の神、これまで、けんしきたる」とて、かきけすやうに、うせ給ふ。

〔挿絵・第六図〕

六人のひと／＼は、このよしをみたまひて、三しやの神の、かへらせ給ふ御あとを、ふしおかみ給ひつゝ、をしへにまかせて、川上をのほらせ給ひて、み給へは、をしへのことく、十七八の上らうの、ちのつきたる物をあらふとて、なみたとゝもにましますか、よりみつ、このよし御らんして、「いかなるものそ」と、はせたまへは、ひめきみ、このよしきこしめし、「さん候。身つかはは、みやこのものにて候か、ある夜、きしんにつかま

れて、これまでまいりて候か、こひしきふたりのち、はゝや、おちやめのとあひもせて、かくあさましきすかたをは、あはれとおほしめせや」とて、たゞ、さめ／＼となき給ふ。

おつるなみたのひまよりも、「あら、あさましや。このところは、おにのいはやと申て、人けん、さらにもくる事なし。きやくそうちちは、これまできたらせ給ふそや。いかにもして、みつからを、みやこへかへしてたひたまへ」と、おほせもあへす、たゞ、さめ／＼となきたまふ。

らいくわう、このよし、きこしめし、「御身は、みやこにては、たれの御子」と、とはせ給へは、「さん候。身つからは、花その、中なこんの、ひとり姫にてありけるか、われらはかりにかきらす、十よ人おはします。このほと、いけたの中納言くにたか卿のひめ君も、とられて、これにまします□□してをきて、そのゝちは、身のうちよりも、ちをしほり、さけと名つけて、ちをはのみ、さかなと名つけて、しゝむらをそき、くはるゝことのかなしみを、そはにてみるもあはれなり。ほり川の中なこんのひめ君も、けさ、ちをしほられ給ふそや。そのかたひらを、身つからか、あらふことのかなしさ、まことにものうき事を」とて、さめ／＼となき給へは、おにをあさむく人／＼は、「けに、ことはり」とて、ともに、なみたにむせび給ふ。

しゆ天童子 中（題簽）

よりみつ、おほせけるやうは、「おにをたいらげ、御身たちを、こと／＼く、みやこへかへさん、そのため、これまで、たつねまいりたり。おにのすみかを、ねんころに、かたらせ給へ」

とありければ、ひめ君、このよし、聞しめし、「これは、ゆめかや、うつゝかや。そのきなは、かたり申さん。此川かみを、のほらせ給ひて御らんせよ。くろかねのつゐちをつき、くろかねのもんをたて、又、そのうちには、つゐちをつき、あかゝねのもんをたて、くちには、おにかあつまりて、はんをしてこそゐたりけれ。いかにもして、もんよりうちへ、しのひりて御らんせよ。るりのくうてん、玉をたれ、いらかをならへ、たてをきたり。その中に、四節の四季をまなひつゝ、てつの御所と名つけて、くろかねにて、やかたをたて、よるにもなれば、そのうちに、我らをはしめ、あまたの女房をあつめ、あいせさせ、あしてをさすらせ、おきふし申せしか、らうのくちには、けんそくともに、ほしくまとうし、くまとうし、とらくまとうし、かねとうしとて、四天わうとなつて、はんをせさせてをきけり。かれら四人のちからのはと、いかほと有ありとも、たとへん方もなきときく。しゆてんとうしかそのすかた、いろいろすあかく、せいたかく、かみはかふろにをしみたし、ひるのあひたは人なれとも、よるにもなれば、おそろしき、そのたけ一ちやうあまりにして、たとへていはんかたもなし。かのおに、つねにさけのむ。えひて、ふしたるものなれば、わか身のうするもしらぬなり。いかにもして、しのひいり、しゆてんとうしにさけをもり、えひてふしたるところをみて、思ひのまゝに、うちたまへ。きしんは、てんめいつきはてゝ、つゐには、うたれ申へし。いかにも、さいかくおはしませ、きやくそうたち」とそ、仰ける。

さて、六人のひとくへは、ひめ君のをしへにまかせて、川か

るかや。かたれ。きかん」と申ける。

みをのほらせ給へは、ほともなく、くるかねのもんにつく。はんのおにとも、これを見て、「こは、なにものそ、めつらしや。このほと、人をくはすして、人をこひけるおりふしに、くにん、なつのむしとんて、火に入とは、今こそ思ひしられたり。いさや、引きき、くはん」とて、われもくへといさみける。

その中に、おにひとり、申けるは、「あはてゝ、ことをしそんすな。かくめつらしきさかなをは、わたくしにては、かなふまし。かみへ、ことはり、きよいしたいに、引ききくはん」と申ける。

「もつとも」とて、それよりも、おくをさして参りつゝ、此よし、かくといひければ、

【挿絵・第二図】

とうし、このよし、きくよりも、「こは、ふしきなるしたいかな。何さま、たいめん申へし。こなたへ、しやうし申せ」とありければ、六人のひとくへを、えんのうへにそ、しやうしける。

そのうち、なまくさき風ふきて、らいでん、いなつま、しきりにして、せんこをはうする、その中に、いろいろすあかく、せ

いたかく、かみはかふろにをしみたし、わうかうしのをり物に、くれなゐのはかまをきて、てつちやうをつけにつけ、あたりをにらんで立たりしは、身のけもよたはばかりなり。

とうし、申けるやは、「わか住山は、つねならず、せきかんか」とそひえて、たにふかくして、みちもなし。てんをはしるつはさ、地をはしたけたものまで、みちかなければ、くる事なし。いはんや、めんくへは、人けんとして、天をかけりてきた

と、えんよりうへよひあけて、なをも、心をしらんため、とうし、申されるやうは、「もたせの御しゆのありときく。我らも又、きやくそうちにも、御しゆ一つ申さん。それく」とありければ、「うけ給はる」と申て、さけと名つけて、ちをしほり、てうしに入て、さかつときそへ、とうしかまへにそをきにけ

る。夜もすから、さかもりせん」とそ申されける。

【挿絵・第三図】

とうし、此よし、きくよりも、「さては、くるしうなき人か」と、えんよりうへよひあけて、なをも、心をしらんため、とうし、申されるやうは、「もたせの御しゆのありときく。我らも又、きやくそうちにも、御しゆ一つ申さん。それく」とありければ、「うけ給はる」と申て、さけと名つけて、ちをしほり、てうしに入て、さかつときそへ、とうしかまへにそをきにけ

どうし、さかつたりと/orて、らいくわうにこそ、さしにけ
れ。よりみつ、さかつたりと/orて、これも、さらりとほされ
けり。しゆてんと/orしか、これをみて、「そのさかつを、つき
へ」といふ。「うけ給はる」とて、つなにさす。つなも、さかつ
きひとつうけ、さらりとこそはほしにけれ。

どうし、申けるやうは、「さかなはなきか」とありければ、「う
け給はる」と申て、今きりたるとおほしくて、かいなとも」と、
いたにそへ、とうしがまへにそをきにける。

とうし、このよし、みるよりも、「それ、こしらへて参らせよ」、
「うけ給はる」とて、たつところを、よりみつは、御らんして、
「それかし、こしらへ、給はらん」と、こしのさしそへ、する

りとぬき、しゝむら四五寸、をしきりて、したうちしてこそく
はれけれ。

つな、このよしをみるよりも、「御心さしのありかたさよ。そ
れかしも給はらん」と、これも、四五寸、をしきりて、うまそ
うにこそくひにけれ。

〔挿絵・第四図〕

とうし、このよし、みるよりも、「きやくそなたちは、いかな
る山にすみなれて、かゝるめつらしき、さけさかなをまいる事
こそ、ふしきなれ」。

よりみつ、きこしめし、「御ふしんは、ことはりなり。我らか

きやうのならひにて、しひとて給はるものあれは、たとへ、心
にうけすとも、いなといふ事さらになし。ことに、かやうのさ
けさかなをくふに、うかひしいはれあり。うつもうたるゝも、
ゆめのうち、そくしんそくふつ、これなるゆへ、くふに二つの

あちはひなし。我らもともにうかふなり。あら、かたしけな」と、らいすれば、きしんにわうたうなきとかや、とうしも、か
へりて、らいくはうを、らいはいするこそ、うれしけれ。
とうし、申されけるやうは、「心にそまぬさけさかなを、参ら
せけるこそ、ほいなけれ。よのきやくそなへは、むやく」とて、
心とけてそみえにける。

そのとき、らいくわう、さしきをたち、くたんのさけを取出
し、「これは、みやこよりの、ちさんのさけにて候へはおそれ
ながら、とうしへも、御しゆひとつ、まいらせん。御心みのた
めに」とて、よりみつ、ひとつ、さらりとほし、しゆてんと
しにさし給ふ。

とうし、さかつきうけとり、これも、さらりとほしにけれ。
けにも、しんへんきとくしゆ、あら有かたや、ふしきのさけの

ことなれば、そのあち、かんろにのことくにて、心もこと葉も
をよはれず、なのめならすによろこひて、「わかさいあいの女は
うあり。よひ出して、のません」とて、くにたかのひめきみと、
花そのゝひめきみを、よひいたし、さしきになをしけり。

らいくはう、このよし、御らんして、「これは、又、みやこよ
りの上らうたちにまいらせん」と、おしゃくにこそは、たゝれ
けれ。

〔挿絵・第五図〕

とうし、あまりのうれしさに、えひほれ、申けるやうは、「そ
れかしかしにしへを、かたりてきかせ申へし。ほんこくは、ゑ
ちこのもの、山てらそたちのちこなりしか、ほうしにねたみあ
るにより、あまたのほうしをさしころし、その世にひえの山に

つき、『わかつむ山そ』と思ひしに、てんけうといふぼうし、ほとけたちをかたらひて、『わかつそま』とて、おひいたす。ちからをよはす、山をいて、又、このみねに住しとき、こうぼうし大しといふえせものか、ふうして、こゝをもおひいたせは、ちからをよはぬところに、今は、さやうのほうしもなし。いまは、かうやの山ににうちやうす。今又、こゝにたちかへり、なにのしさいも候はす。みやこよりも、我ほしき上らうたちをめしよせて、おもひのまゝにめしつかひ、さしきのていを御らんせよ、るりのくうてん、玉をたれ、いらかをならへたてをきて、はんほくせんさんまのまへに、春かとおもへは、なつもあり、秋かとおもへは、ふゆもあり。かゝるさしきのそのうちに、てつの御所とて、くろかねにてやかたをたて、よるにもなれば、そのうちに、女はうたちをあつめをき、あし手をさすらせ、をきふし申か、いかなるしよてんわうの身なり共、これには、いかてまさるへき。されとも、心にかゝりしは、みやこの中にかくれなき、らいくわうと申て、大あく人のつはものなり。ちからは日本にならひなし。又、らいくわうからうとうに、さたみつ、すゑたけ、きんとき、つな、ほうしやう、いつれもふんふ二たうのつはものなり。これら六人のものともこそ、心にかり候なり。それをいかにと申に、過つる春の事なるに、それしかめしつかふ、いはらきとうしといふおにを、みやこへつかひにのほせしとき、七てうのほり川にて、かのつなにわたりあふ。いはらき、やかて心得て、女のすかたにさまをかへ、つかあたりに立より、もととりを、むすととりつかんで、こんとせしところを、つな、このよしをみるよりも、三しやく五寸、

するりとぬき、いはらきかかたうてを、水もたまらず、うちおとす。やうく、ふりやくをめくらして、かいなをとりかへし、今はしさいも候はす。きやつはらかむつかしさに、われは、みやこにゆく事なし』。

そのうち、しゆてんとうしは、よりみつの御すかたを、めをもはなさず、うちなかめ、「さても、ふしきの人／＼や。御身かすかたをよくみるに、らいくわうにておはします。さて、そのつきは、いはらきかかひなをきりし、つなにてあり。のこる四人の人／＼は、さたみつ、すゑたけ、きんとき、ほうしやうとこそ、おほえたれ。我らかみるめは、ちかふまし。いふしう候。おたちあれ。是にありあふおにともよ、こゝろゆるしてけかるな。我らも、まかりたつそ」とて、いろをかへてそ、ひしめきける。

らいくわう、此よし御らんして、「こゝをちんしそんするならは、ことの大事」とおほしめし、もとより、ふんふ二たうの人なれば、少しもさかぬけしきにて、からくと打わらひ、「さても、うれしのおほせかな。日ほん一のつはものに、山ふしともかにたるとや。そのらいくはうも、すゑたけも、なをきくたにもはしめにて、まして、みることはなし。たゞ今、おほせをよくきけば、あくきやくふたうの人ときく。あら、もつたないなや、あさましや。さやうの人はには、にるもいや。我らかさやうのならひとして、ものゝいのちをたすけんため、山路を家とする事も、うへたるこらうに身をあたへ、うしやうむしやうをすくはんため、しゃかむによらいのいにしへは、しうふうと名をつけて、しょこくをしゆ行にいて給ふ。あるとき、山路をと

をさせ給へは、ふかきたにのそこよりも、なにものなるとはしらねとも、『しよきやうむしやう』ととなへければ、たにへくたりて御らんするに、九そく八めんのきしんとて、かしらは八つ、あし九つ、さもおそろしきおにそ有。しうふう、かれにちかつきて、『たゞ今となへしはんけのもん、われにさつけよかし』とある。きしん、こたへていふやうは、『さつけんことはやすけれと、うへにのそみてちからなし。人の身をたにふくするなは、となへん』とこそ申ける。しうふう、このよしきこしめし、『それこそ、やすきことなるへし。のこりのもんをとなふるなは、なんちかえしきに、それかしならん』と仰ければ、きしん、なめによろこひて、のこりしもんをそ、となへける。『せしやうめつぼう、しやうめつ／＼、しやくめつ／＼らく』と、なへければ、しうふう、これをさつかりて、『あら、有かたや』とらいしつゝ、きしんかくちにいらせ給へは、すなはち、ほさつとあらはれ、きしんは、すなはち、ひるしやなふつ、しうふうは、しゃか仏なり。又ある時は、これやこの、はとのはかりに身をかけしも、みなこれ、いけるをたすけんため、これにありあふ山ふし、おなしきやうにて候へは、もんをひとつさつけつゝ、はやく、いのちをめさるへし。つゆぢりほともおしからし」と、さもありさうにの給へは、とうし、これにたはかられ、おもてのいろをなをしつゝ、「仰をきけば、ありかたや、かのやつはらか、これまでは、よもきたらしとは思へとも、つねに心にかかるゆへ、えひても、ほんちわすれす」とて、「御ちさんのさけにえひ、たゞ、くりこと、おほしめせ。あかきは、さけのとかそかし。おにと、なおほしめされそよ。われも、そなたの御すか

た、うちみには、おそろしけれと、なれて、つぼいは山ふしと、うたひかなてゝ、心をうちとけ、さしうけ／＼、のむほとに、これぞ、しんへんきとくのさけなれば、五さう六ふにしみわたり、こゝろもすかたもうちみたれ、「いかに、ありあふおにともよ、かくめつらしき御しゆ、ひとつ、御まへにて下されて、きやくそうをなくさめよ。一さしまへ」とそ仰ける。

「うけ給はる」とたつ所を、よりみつ、此よし御らんして、「まつ、御しゆ一つ申さん」とて、ならひゐたりしおにともに、くたんのさけをもち給へは、五さう六ふにしみわたり、せんこも、さらにはきまへす。

その中に、いしくまうしは、すんと立て、まふたりける。

さけやさかのかさしとはなる
宮こよりいかなる人のまよひ来て

「おもしろや」と、をしかへし／＼、二三へんこそ、かなでけれ。

〔挿絵・第六図〕

此心をよくきけば、「これにありける山ふし共を、さけやさかにななすへし」との、歌の心とおぼえたり。

やかて、らいくわう、おしやくにこそ、たゞれける。どうしがうけたるさかつときを、つな、此よしめるよりも、すんと立てそ、まふたりける。

としをへておにの岩屋に春のきて

風やさそひて花やちらさん

「おもしろや」と、これも又、をしかへし、二三へんこそ、まふたりけれ。

此歌の心は、「是に有あふおに共を、あらしに花のちることくになすへし」との歌の心を、おには、すこしも聞しらす、只、「おもしろや」とかんしつゝ、したいくにえひはれて、とうし、申されけるやうは、「いかに、ありあふおにともよ、きやくそうたちを、よきになくさめ申へし。それか代くはんには、二人の姫をのこしをく。それに、はしばらくおやすみあれ。明日たいめん申へし」とて、とうしは、おくにそ入にける。

しゆ天童子 下（題簽）

残るおにとも、とうしのかへらせ給ふをみて、こゝやかしこにふしたる。さながら、しにんのことくなり。

らいくわう、このよし御らんして、二人のひめ君をちかつけて、御身たちは、みやこにては、たれ人のひめにてましますそ。「さん候。身つからは、いけたの中納言くにの、ひとりひめにてありけるか、ちかきほとにとられ来て、こひしきふたるのち、はゝや、おちやめのとにあひもせて、かく、あさましきありさまを、あはれとおほしめせや」とて、たゞ、さめくとなき給ふ。

「今一人の姫君は」と、とはせ給へは、「さん候。身つからは、よし田のさいしやうの、をとひめにてさぶらひしか、中く、いのちのきえやらで、うらめしさよ」と、かきくとき、二人の姫君もろともに、こゑもおします、きえいるやうに、なき給ふ。よりみつ、このよし、きこしめし、「たうりなり。ことはりなり。さりながら、おにともを、こんや、たいらけて、御身たちを、みやこへ御とも申つゝ、恋しきふたりのちはに、けんさ

んせさせ申へし。おにのふしどを、われくに、ねんごろにみち引給へ」とありければ、ひめ君たちは、きこしめし、「これは、夢かや、うつゝかや。そのきてあるならは、おにのふしどを、われく、よきにあんない申へし。御ようあれ」とのたまへは、

【挿絵・第一図】

らいくわう、なのめにおほしめし、「そのきてさぶらはゝめんく、ものゝくしたまへ」とて、まつ、かたはらにそ、しのはれける。

さて、よりみつの出たちは、らんてんくさりと申て、ひおとしのよろひをめし、三しやの神の給はりし、ほしかふとに、おなしけの、しゝわうと申せし御かふとを、をしかさねてめされつゝ、ちすいと申せしつるきをもち、「なむや、八まん大ほさつ」と、心中にきねんして、すゝみ給へは、のこる五人のひとくも、おもひくのよろひをき、いつれもおとらぬつるきをもち、女房をさきにたて、こゝろしつかにしのひゆく。ひろきさしきをうち過て、いしはしをうちわたり、うちのていを見給へは、みなく、さけにえひふして、「たそ」ととかむるおにもなし。

さて、のりこえく、み給へは、ひろきさしきのその中に、くろかねにてやかたをたて、おなし戸ひらに、くろかねのふとくはんぬき、さしかためたり。ほんぶのちからにて、中く、うちへいるべき。

【挿絵・第二図】

あらありかたや、三しやの神のあらはれ給ひつゝ、六人の人々に、「よくく、これまでまいりたり。さりながら、心やす

く思ふへし。おにのあし手を、われ／＼、くさりにてつなきて、四方のはしらにゆひつけて、はたらくけしきはあるましきそ。よりみつは、くひをきれ。のこる五人のものともは、あとやさきに立まさり、すん／＼にきり、すでに、しさいはあらし」との給ひて、もんの戸ひらをゝしひらき、かきけすやうにうせ給ふ。

「さては、三しやの神たちの、これまで、あらはれ給ふか」と、かんるい、きもにめいしつゝ、たのもしくは思へとも、をしへにまかせて、らいくわうは、かしらのかたに立まはり、ちすいをするりとぬき給ひて、「なむや、三しやの御神たち、ちからをあはせてたひ給へ」と、三度らいして、きり給へは、きしん、まなこをみひらきて、「なきけなしとよ、きやくそうちち。いつはりなしときゝつるに、きしんにわうとうなきものを」と、おきあからんとせしかとも、あしてはくさりにつながれて、おへきやうのあらされは、おゝこゑをあけてさけふこゑ、らいでん、いかつち、天地もひゝきわたりけり。

もとよりも、つはものとも、かたなはつるき、たちはやに、すん／＼にきり給へは、くひは天にそまひあかる。されは、らいくはうを目にかけて、たゞ一かみとねらひしかとも、ほしかふとにおそれをなし、その身にしさいはなかりけり。

〔挿絵・第三図〕

かくて、あし手、どうまで、きりちらし、大にはさしていて給ふ。あまたのおにのその中に、「いはらきとうし」と名のりて、「しうをうちしやつはらに、手なみのほとをみせん」とて、おもてもふらす、かゝりける。

つなは、このよしめるよりも、「手なみのほとはしりつらん。めにものみせてくれん」とて、おふつまくつつ、しはしかほと、たゞかひけれども、さらに、せうふは見えさりけり。をしならへて、むすとくみ、うへをしたへと、もてかへす。

つなかちからは三百人、いはらきかちからやつよかりけん、つなを、とつてをしふする。らいくはう、このよし御らんして、はしりかゝつて、いはらきかほそくひ、ちうに打おとせは、いしくまとうし、かねどうし、その他、もんをかためたる、十人あまりのおにともか、このよしをみるよりも、「今はとうしはましまます、いつくをすみかとなすへきそ。おにのいは屋もくつれよ」と、おめきさけんてかゝりける。

六人の人／＼は、此よしをみ給ひて、「やさしのやつはらや。手なみのほとをみせん」とて、ならひ給ひしひやうほうを、とりいたさせ給ひて、あなたこなたへおひつめて、あまたのおにとも、ことくくたいらけて、しはらく、いきをそつかれける。

〔挿絵・第四図〕

よりみつ、おほせけるやうは、「いかに、女房たち、はや／＼、いてさせ給ふへし。今は、しさいもるまし」と、のたまへは、このこゑをきくよりも、とられてまします女はうたち、人屋のうちより、ころひおち、らいくはうをめにかけて、「これは、ゆめかやうつゝかや。われらをも、たすけてたひ給へ」と、われも／＼と手をあけて、なげきかなしむありさまを、ものによく／＼たとふれば、つみふかきさい人か、こゝそつの手にわたり、むけん地こくにおとされしを、地さうほさつのしやくちやうにて、「をんかかせんきいそはか」と、すべひとらせ給ひしも、

かくやと思ひしられたり。

そのとき、六人のひとくは、姫君たちをさきにたて、おくのていをみ給へは、くうてんらうかく、玉をたれ、四節の四季をまなひつゝ、いらかをならへてたてたるは、こゝろもことはもをよはれす。

又、かたはらを見給へは、しこつ、白こつ、なましき人、あるひは、人をすしにし、あるひは、木のえたにかけほして有もあり。あるひは、いきたえ、はんしのいていて、あし手をきられし人、中／＼、めもあてられぬありさまなり。

その中に、十七八の上らうの、かたうておとされ、もゝそかれしか、いまたいのちはきえやらて、なきかなしみてましますを、よりみつ、みたまひて、「あのひめ君は、みやこにて、たれのひめ君にてましますそ」。

女はうたちは、きこしめし、「さん候。あれこそは、ほり川の中なこんのひめ君にてさふらふ」とて、いそき、そはにはしりよりて、「いかに、ひめ君、いたはしや。身つからともは、きやくそうたちの、おに、こと／＼たいらけて、宮こにつれてかへらせ給ふか、御身一人のこしきを、かへるへきかや、かなしやな。かくおそしきちこくにも、御身に心のひかされ、あとに心の、こるそ」と、かみかきて、「なにことにてもあれ、御心におほしめさるゝことあらは、われ／＼に、かたらせ給へ。みやこのほり候は、御ち／＼はに、よきにつたへて参らすへし。姫君、いかに」とありければ、

〔挿絵・第五図〕

このよしをきこしめし、「うらやましの人／＼やな。かくあさま

しきつゆの身の、はやくもさきにきえもせて、かやうのすかた、人／＼に、みえまいらすることの、はつかしさよ。みやこにのほらせ給ひなは、ちゝはゝの、このことをしろしめされてさふらはゝ、わか身の事を、中／＼に、なげき給はんことの、かなしさよ。『おもひのたねなれと、ひめかかたみ』との給ひて、わかくろかみを、きりてたへ。『このこそては、身つから、いまはのとき、きてきたる』とて、このくろかみを、しつゝみて、はゝうへさまにまいらせて、『こせをは、かならす、とはせてたひ給へ』と、いとねんころに、いひつたへてたひ給へ。いかに、あれなるきやくそうち、かへらせ給はぬそのさきに、身つからに、とゝめをさして給はれ」と、きえいるやうになき給ふ。

らいくわう、このよし、きこしめし、「けに、たうりなり。ことはりなり。さりながら、みやこにのほりて候はゝ、ちゝはゝに、このことを、よきにあんな申つゝ、あすにならは、むかひの人をくたすへし。心やすく思ひ給へ。いとま申て、さらは」とて、ものうきほらをたち出て、「たによ、みねよ」と打すぎて、いそかせたまへは、ほともなく、大江山のふもとなる、下むらのさいしよにつく。

みつより、おほせけるは、「いかに、ところのものともよ。いそき、でん馬をふれさせよ。この女はうたちを、みやこへをくるへし。いかに／＼」おほせければ、「うけ給はる」と申ける。そのころ、たんはのこくしをは、大宮の大臣殿と申ける。このよしをきこしめし、「さて、めてたきしたい」とて、いそき、さつしやう、かまへ参らせける、そのひまに、馬にのり物にて、人／＼を、みやこへをくり給ひける。

宮には、このことを聞よりも、「らいくわうの御のぼりを、
けんふつせん」とて、さゝめきわたりて、ひかへたり。

〔挿絵・第六図〕

その中に、姫をとられし、いけたの中納言ふうふの人も、出
給ひ、「いつくまでも、あひしたい」と、「母うへさま」とて、
なき給ふ。

はゝうへ、此よし、御らんして、する／＼とはしりより、姫
君に取つきて、「是は夢かやうつゝか」と、きえ入やうになき給
へは、中納言も聞召、「一度はなれし我姫に、二たひあふこそ、
うれしけれ」と、いそき、宿所に帰らせ給。

よりみつは、参内あり。みかと、えいらんまし／＼て、御か
んは申はかりなし。それよりも、国土あんせん長久に、おさま
る御代とぞ成にける。「かのらいくわうの、ためしすくなき弓取」
とて、上一人より、下万民にいたるまで、かんせぬものはなか
りけり。